創業２００年に思う

２００３年は清水建設創業２００年である。当社を始めとする大手総合建設業は何故長寿命企業なのか。その理由は品質第一・誠実モットー・顧客第一、さらには変化に対応し、絶えざる改革を行い、コアとなる強みを持つ経営であった。このことは今後も変わらない。顧客の信頼がなければ２００年も継続できる訳がなく、この理念に基づく長期にわたる活動が企業ブランドを形成してきた。

生物の生き残りの基本は、変化に如何に対応するかであるが、企業存続のためには変えてはいけない基本的な事項がある。変化させる部分と堅持しなければならない部分を見誤ってはならない。

江戸から明治への変革、大正の関東大震災、昭和恐慌・世界恐慌、太平洋戦争、バブル経済の崩壊と幾多の荒波が我々を襲ってきた。これらの荒波を乗り切った企業には常に優れた経営者がおり、建設産業そのものの存続の危機についても産業界のリーダー自らが立ち向かっていった。

幕末から明治への荒波を乗り切った清水組の二代目喜助、建築業協会の前身である「建築業有志協会」を設立した清水組の初代支配人原林之助、大正時代に建設業の抱える三課題に果敢に挑戦した横河民輔と鹿島精一、太平洋戦争後の建設産業の苦境を救うために奮闘した竹中藤右衛門の各先輩達がいた。

次の２００年のために２０世紀の技術と２１世紀に求められる技術について考察する。１９７３年即ち２０世紀の後半になってＥ・Ｆ・シューマッハーは１９世紀は巨大主義と大量生産の時代であり、今後は「人間の顔を持った技術」を指向すべきであると主張した。自然界の現象は必ず限度を持って行われるが、技術による行為は限度を知らない恐ろしさがあるとした。１９７７年エイモリー・ロビンスは「モア・イズ・ベターの発想からイナフ・イズ・ベスト」の発想へ転換すべしと主張した。

２０世紀は経済と効率を追求する社会であった。集団の力が大切にされ、ヒエラルキー社会、整然とした組織社会であり、皆がベクトルを合わせて頑張る時代だった。科学技術も大いなる進歩をとげ、システム技術は月に人間を運び、建設産業にも自動化・ロボット化が導入された。製品は大量生産され、コストダウンが至上課題であった。結果として自然が破壊され、公害が発生し、ストレスが人々を襲った。

２１世紀は人間を大切にし、自然との共生が大切にされる社会となる。豊かさとやすらぎが求められ、個人が大切になり、多様性の社会となる。ＮＧＯやＮＰＯが社会で重要な役割を果たす。

環境問題はいよいよ循環型社会へ入り、豊かで多様な社会の構築のためには、環境負荷の低減技術以上に豊かな環境の創造技術が大切になる。歴史や文化が重視され地域の歴史的建物、景観が地域の中心となることを確信する。

一方、新時代のＩＴツールを駆使して、東北の農村に設置された研究所とボストンにあるＭＩＴの教授との間で共同研究が進められているであろう。沖縄の小さな会社が世界最先端の生体バイオ製品を輸出し、日本最大企業に成長しているであろう。日本にも世界の人々が数多く居住し、真の国際社会日本が成立している。

創業２００年記念の一環として行われた技術研究所本館新設記念に際し、古代建設技術の調査を行った。古墳築造技術、古来河川技術、深川地域土地変遷、古代建築技術、日本庭園技術などである。先端技術以上に古来の建設技術が２１世紀から２３世紀へ向けて本来の人間らしさを呼び戻す何かを教えてくれるのではと言う期待を持っている。

２２０３年創業４００年記念の時に我々のこのささやかな活動が意味を持っていることを期待したい。

技術は今後も人類社会のために重要なツールで有り続けると信じている。そのためには技術者は当然のことながら、多くの人々が技術の行き過ぎをウオッチしなければならない。エイモリー・ロビンスの「モア・イズ・ベターの発想からイナフ・イズ・ベスト」の思想を今一度考える必要がある。古来の建設技術がそのための有力なツールとなることを期待したい。

2003 年 9 月

清水建設株式会社

常務執行役員　技術研究所長

工学博士　藤　盛　紀　明